

平井松午 編

『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』

古今書院 2019年3月 298頁 8,400円+税

本書は二部構成となっている。まず、景観分析が城下絵図研究に不可欠な研究手法であることが示され(第Ⅰ部)、GISソフトのデータベース機能の活用が城下絵図研究に有用な研究手法であることが示される(第Ⅱ部)。本書のタイトル『近世城下絵図の景観分析・GIS分析』は、それを如実に表現している。

門外漢の評者にはGISを語る資格はない。城下町の、とくに町人町における祭礼を研究している評者は、その視座からでしか本書にアプローチできなかったことを、まずお断りしておきたい。

序章(平井松午)で本書の基本的な研究視座が示される。GISソフトのデータベース機能を活用することにより、近世城下町における身分による居住区画がはっきりと区分された「地域制」が変質していくプロセスの実態が明らかとなること、そして、「城下町の過半は侍屋敷地で占められることから、以下では城下屋敷割図を対象に論を進める」(2頁)との研究スタンスが表明される。本書のタイトルを「近世城下町絵図」としていないことに、評者は少々の違和感を持ったのであるが、それは城下町における町人地ではなく武家地に焦点を当ててることを含意した表現でもあったわけである。

また、初期の城下町の有様を示す城下絵図はほとんど残されておらず、「近世城下絵図の多くは、正保元(1644)年の「城絵図」調進命令以降に作成されてくる」(2頁)ことが指摘される。

鳥取城下町をはじめ、「侍屋敷地の相対替えや売買、町人への貸与や菜園利用といった屋敷地の目的外利用については、近世中期以降各地で広くみられるようになり、「そうした背景には、家臣の増加に伴う拝領地の不足あるいは幕府や藩の財政窮乏という事情があ」った(7頁)。そのために屋敷割帳や屋敷割絵図が整備され、残されてきたのである。

第Ⅰ部は城下絵図からの景観の読み解きである。

第1章(安里 進)は首里那覇鳥瞰図の分析である。行論のなかで、18世紀前期に久茂地川兩岸を埋め立てて造成した諸職人町が成立したことが

注目される。河川への近接性を重んじた町立てが、琉球城下町においては18世紀前期になってようやく出現したのも束の間、19世紀初期には久茂地川東岸側が過疎化・無人化してしまうのである。時系列を追った鳥瞰図分析を通して、首里城下町における町人地の町立てにおいて、河川への近接性を重視してはいなかったことがうかがえる。

第2章(岡村一幸)は豊後の臼杵城下町の分析である。この章におけるキーワードとして、評者は「祇園」に注目した。牛頭天王すなわち八坂神社が臼杵城下町の総鎮守であり続けている。筆者が城下絵図を読み解くための「指標となる歴史的事象等」(50頁)として挙げられている「寺社の位置」、とりわけ総鎮守とその移動に注目すると、町人地の展開とその方向性がみえてくる。「仁王座」とは祇園社の仁王門が所在していたことにちなむ地名という。「祇園洲」という砂洲名は、祇園社(現、八坂神社)が所在すること由来する。ゆえに、仁王座→祇園洲→祇園馬場(現、御旅所。海添地区)という鎮守社とその御旅所、神輿渡御のルートを追うことで、町人地の海浜への拡大の方向性を捉えることができるのである。第1章とは対照的に、臼杵城下町の町人地は河川や海浜といった水域への近接性が重視されたまま、戦国期から近世期へ移行していったことが明らかとなる。

第3章(磯永和貴)は長府城下町の分析である。地籍図をベースマップとして弘化3(1846)年「長府城下町屋敷割図」のデータを重ね合わせて作成された図3-3「檀具川以北の町人町と侍町の混住地域」(60頁)、図3-4「檀具川以南の侍町」(61頁)は貴重である。評者は、インターネット公開されている弘化3(1846)年「長府城下町屋敷割図」を閲覧できた。それによると、図3-3中で、忌宮(長門二宮)門前に所在し、「中浜町」に沿う空白の「42」が「本宿」であったことが判明した。

伊藤 毅が『『宿』の二類型』を問題にし¹⁾、宿衛・宿直の場としての武家地系の「宿」と町場としての町系の「宿」を摘出し、前者が「境内」、後者は「町」にもとづくとしている。

「長府城下町屋敷割図」の「本宿」は町人地を示す青色ではなく、武家地を示す白地に「本宿」と墨書されており、しかも、それはかつて長門二宮の境内地に所在していた可能性が高い、武家地

系の「宿」であったことが判る。旧境内地に山陽道を通したことになり、山村亜希の業績²⁾を参考にした図3-1「古代国府と中世府中の概念図」(55頁)に符合する。地籍図と「長府城下町屋敷割図」を照合させた図3-3をみると、山陽道の忌宮神社(長門二宮)側と浜側では、神社側が明らかに奥行き短い狭小な地割になっており、浜側のゆとりある奥行きとは対照をなしている。ほぼ2間の間口で整っていることへの注目も大切であるが、両側町においてその奥行きの長短に明らかな相違があることは、従前よりの山陽道を基軸とした近世城下町の町割がおこなわれたことを示す、重要な証拠ではないだろうか。また、図3-4「檀具川以南の侍町」(61頁)における「三吉酒造」とは「三吉造酒」の誤りである。

第4章は平井松平・根津寿夫・塚本章宏・田中耕市による徳島城下町の分析である。徳島城下の総鎮守が金刀比羅神社であることから、海運の無事と発展への徳島城下町からの祈願がうかがえる。「元和2年(1616)の観音寺や金刀比羅神社の勢見岩ノ鼻への移転は、城下町再編計画をも見据えてのことかもしれない」(69頁)とあり、評者も、城下町再編と総鎮守の移転とは密接な関わりがあると考えている。

侍(武家)屋敷地は本来、藩主が家臣に対して下賜するものであるが、「諸藩においては近世後期～幕末期には家臣が増加し、城下内(山下内)に下賜すべき屋敷地が確保できず、御長屋や農民・町人屋敷に住む家臣が急増し」(77頁)、徳島城下においても同様の条件から、近世後期から幕末期に多くの屋敷割図が描かれた。

元禄6(1693)年には伊予街道沿いに伸びる町場に112軒であった家数は、寛政元(1789)年には583軒まで増加し、とりわけ、伊予街道と土佐街道が交わる新町地区では、町数・家数ともに内町地区を凌ぐ発展がみられた。可能であるならば、町人地に住した家臣の急増を、町人地を分析することで示してほしかった。

第5章(山村亜希)は犬山城下町の分析である。著者の前稿³⁾と合わせ読んだほうが文意の伝わる場所もあり、本書の第5章では、犬山城下町の町人町に関する考察は外した格好になっている。犬山城下の武家地の一つに「北宿」があるが(98頁)、これが武家地系の宿なのか、町場の宿の系

譜を引いたものであるのか、推定が難しい。

犬山城および城下町の総鎮守が、加賀・越前・美濃・飛騨四ヶ国にまたがる白山信仰にもとづく白山社(針綱神社)であったことから、当地における古来よりの長良川・木曾川の水運のさかんさを推し量ることができる。

評者は、白山社(針綱神社)を中心に、その移遷を追うことは城下町の変遷を追うことにつながるのではないかと考えた。天文6(1537)年における城山から東の丸山(東宮山)への遷座、そして17世紀初頭において名栗町、明治期に再び城山へと、白山社は幾度も遷宮を遂げており、中近世移行期、東の丸山に祀られていた頃の白山社門前の七軒町の人々は鎮守社とともに犬山城下に移動し、練屋町町人となったとの伝承を有する。17世紀初頭の白山社を鎮守と祀る人々は練屋町をはじめとする東六町(練屋町・鍛冶屋町・横町・魚屋町・熊野町・寺内町)の町人であった可能性が高い。当時、東六町と西六町(上本町・中本町・下本町・名栗町・外町・鵜飼町)の境目ともいえる名栗町に白山社を遷宮しているのだから、総鎮守の鎮座地の移動と設定は、藩が町人町の中心を操作し、東西の町人町を競合させながら統治する意図があったことを想起させ、興味深い。

第6章は堀 健彦・小田匡保・渡部浩二による越後国新発田城下町絵図の分析である。「新発田城下町の空間的変容として、城下町自体の拡大、寺社の移転・増設、河川流路の変化が特徴的」(122頁)であった。「町屋敷地区が会津街道沿いに城南部に広が」り、「新発田川分流の北側には本町と称される3町が存在し、川を挟んだ対岸には新町と称される7町が存在している。本町のうちの下町の地割普請は慶長14(1609)年に実施されており、城下町の形成は入府以降、慶長年間を通して進められていったことがわかる。それに対して新町のうち、指物町などは元和7(1621)年頃に、材木町などは元文2～3(1737～38)年頃に、職人町は寛永2(1625)年に町立てされた鍛冶町が元禄元(1688)年に移転することで町がつくられており、町屋敷地区の拡大がみてとれる」(106頁)というが、残念ながら図からは読み取れない。図6-2などにおいて、「本町」「指物町」「職人町」などの町名も示してほしかった。「(寺町の東方の)泉町にある諏訪神社は新発田城下町の総

鎮守とされており、元禄元年に現在地（泉町）に移転するまでは鍛冶町にあった。それ以前は城内の古丸に祀られており、新発田藩とかかわりの深い神社であった」（106頁）とあるように、白杵城下町や犬山城下町と同じく、新発田城下町においても、総鎮守の鎮座地の変遷があった。鍛冶町と諏訪神社の結びつきは深いと推測され、町人町の心臓部を移転させることが藩のねらいであった可能性がある。

第7章（長谷川奨悟）は名所図会資料の分析である。「城下町や宿場町など限られた地域を対象とする案内記の編纂は近代以降に多く見られるスタイルである可能性がある」（136頁）とされているが、本章においても事例とされている『犬山視聞図会』などが存在するだけに、少々説得力に欠ける。さらなる博搜による発見もあるだろう。評者の住する三重県には、桑名城下町の名所図会である『久波奈名所図会』が存在する。

本章では、長足庵甫磨の筆による『犬山視聞図会』が紹介されており、この図会には、武家地ではなく、城下町住人の信仰や誇りとするものが投影されているように、評者には感じられた。祭礼・風俗は『尾張名所図会』ほどには叙述され描かれてはいないが、白山社（針綱神社）をはじめとする社寺を重視した描写がされており、城下町の社寺の来歴を知る手掛かりとして、名所図会はきわめて有効な史料である。

第Ⅱ部は、武家地における屋敷地移動にフォーカスした論考となっている。

第8章・第9章は、宮崎良美・出田和久・南出眞助による佐賀城下町のGIS分析で、第8章では佐賀城下町の武家地分析が、第9章は町人地分析がおこなわれている。佐賀城下町は、城の西から南にかけては中世以来の古刹・古社とされるような比較的規模の大きい寺社が多く、このうち与賀神社は、龍造寺氏以前の有力者であった小貳氏が、旧館を改めて与賀城とした際に鎮守としたものであった。「城の北や東では街路が直線的」で、「整然とした街区を構成しているのに対して、城の西と南は直線状の道が通らず、街路の食い違いも多い」（156頁）という指摘と組み合わせると、寺社の位置や街区に注目することで、城下町の内外部における先行地区と後発地区とを見分けることができることを示している。

佐賀城下町における武家地の特徴の一つは、「身分、軍制等による居住地の分離が厳密に行われなかったこと」（169頁）であった。「下級武士の組屋敷も近世を通してみられず、手明鍵以下の身分の者には商工業や農業などに従事することが認められ」、「武士であっても町屋地区に居住する者も多数いた。逆に、屋敷帳などからは中級武士と下級武士が混じって屋敷地を構える様子が確認」（169頁）された。

そのようななか、天保年間頃の10代藩主鍋島直正が進めた藩政改革において、軍制などともに武家地の再編を行おうとした動きがみられた（169頁）。佐賀藩の藩政改革のひとつに、藩士が集住すること、コミュニティや共同性重視への再認識があったことがわかり、興味深い。

第9章では、「紺屋町竈帳」から作製されたGIS地図によって、紺屋町における武士と町人の混住の顕著さが示される（179頁）。また、天保7（1836）年に市中郷村に歩卒以下の教育のために「教導所」が設けられ、町屋地区においても学校が設けられ、教育を重視する動きがみられたことが述べられる（182頁）。評者が調査した伊賀国上野城下町においても同様に、天保年間には「教諭所」が町屋地区に設けられていた。（下級）武士・町人が混住する町屋だからこそ教育の場を開設する必要性があったのではないだろうか。脆弱なコミュニティしか持ち得なかった下級武士たちにとって、学校はなくてはならない共同の場であり、まさにエネルギーの高揚する場となっていたことが想定される。

第10章（渡邊秀一）は和歌山城下町の分析である。和歌山城下では階層の上下にかかわりなく、18世紀中に武家屋敷地の固定化が一層進んだ。武士の階層的な変化や職務異動が激しい中で、同一の家による同一の屋敷地の継続的な利用は、拝領屋敷であったものが私邸の性格を強めていくことを示していた。とすれば、武家地における地域共同体としてのコミュニティ機能は、和歌山城下町の場合、ある程度働いたのだろうか。前章の佐賀城下町と比較しての相互扶助活動や教育など、和歌山城下町における武家の日常生活がどのように展開していたのか、知りたく思った。

第11章は、小野寺 淳・田中耕市・永井 博・小橋雄毅による水戸城下絵図の分析である。一般

的に、江戸後期になると、当初の身分制の中で割り当てられた拝領屋敷の屋敷割や居住者に変化がみられるが、水戸ではどうか、という問題意識のもとに、天保期に注目した論考が展開する。水戸藩においては、天保12(1841)年に重臣屋敷があった三の丸に弘道館が設置されており、天保期における藩校をはじめとする教育機関の設立事例が多いことがわかる。コミュニティ機能が希薄な武家地に暮らす人々にとって、教育の場は、共同性が高揚する唯一無二の空間となっていたのではないだろうか。

天保改革で、江戸詰藩士を水戸に移住させるために、城下隣接地に新たに屋敷地が造成された。新屋敷に居住したのは下級藩士であり、中級藩士は城下内に屋敷を与えられた(236頁)。水戸藩の場合、武家屋敷地の移転には、階級ごとのまとまりがあったことがわかる。階級を共にすることによる集団意識と水戸学の高揚が働き、水戸藩では天狗党の乱などの幕末期の下級士族の反乱につながっていくのではないだろうか。大変興味深い。

第12章は、渡辺理絵・角屋由美子・小野寺淳・小橋雄毅による米沢城下および原方集落の屋敷移動のGIS分析である。米沢城下では、三の丸を中心に上級・中級家臣の屋敷が割り振られ、東側の最上川近くに町人町が造成された。町人町を取り囲むように、城下の北・東・南の外縁部に神社地が配置された。さらに、三の丸を拡張しても、城下に収容しきれない下級武士は、城下外縁部の在郷に集落を設けて集住させた(原方衆)。

本章で作製された明和6(1769)年のGIS米沢城下図を通して、18世紀後半の城下では屋敷配置に番組ごとの集住はみられず、混住状況が確認された。そして、明屋敷の増加が顕著であった(251頁)。米沢城下町では、19世紀以降、これら武家地の複雑化と低密度化に、どのように対策していったのであろうか。米沢藩では、前章に見られたような武家地の整理や教育の重視といった政策が顕現したのか、興味が尽きない。

第13章(川口 洋)は19世紀末の南関東における天然痘罹患率・死亡率のGIS分析である。近世から近代にわたり「村落人口が恒常的に都市に流入して、都市人口を維持する機能を果たした」(255頁)人口移動のあり方にどのように接近する

ことができるだろうか。第13章を読むと、これがいかに難題であるかがよくわかる。この難題に立ち向かうために、統計資料はもとより、あらゆる史料を総動員する必要があるだろう。意外な史料に、ヒントが隠されている可能性がある。そのひとつとして、評者は「祭り」があると考えている。大型の祭車を曳行する場合、かつて村人にその助力を求めていた場合は多い。それだけ日常における都市-村落の人的ネットワーク(人間関係)が強かった証拠である。近世および近代における祭礼行事とその互助体制も重要な史料となる。非日常は日常を映し出し、日常は非日常につながっていたと評者は考えている。

最後に、GIS地図の作製は、設定の綿密性と大変な労力を割いたうえに成り立っていることは間違いない。しかし「その作業量ゆえに復元自体がゴールとなってしまう懸念」⁴⁾もある。本書においてもGIS地図化の際の設定・方法論に腐心せざるを得ない章も見られた。それは絵図の歪みが大きい町人地を対象としたときに、である。けれども、町人地を除外した城下町は存在しないので、やはり、GISを生かした武家地研究に終始することなく、そこから見えてきたことをもとに、城下町間の比較検討を進めることや、町人地を含めた城下町を眺め渡す視野の広さが必要なのではないだろうか。「共同性」は、武家地、町人地に暮らした人々を理解する際のひとつの共通のキーワードなのではないかと、評者は本書を読んで考えさせられた。

(渡辺康代)

〔注〕

- 1) 伊藤 毅『『宿』の二類型』(五味文彦・吉田伸之編『都市と商人・芸能民—中世から近世へ—』山川出版社, 1993), 147-165頁。
- 2) 山村亜希『中世都市の空間構造』吉川弘文館, 2009。
- 3) 山村亜希「犬山城下町の空間構造とその形成過程」地域と環境14, 2016, 1-23頁。
- 4) 渡辺理絵・大矢幸雄「18-19世紀の松江城下における武家屋敷の流動性とその背景—歴史GISと屋敷管理史料からの分析を通して—」歴史地理学59-2, 2017, 1-26頁。